



海外への任務も担うC-130H輸送機に乗って浜松上空へ



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は、10月19日（土）、航空自衛隊浜松基地（浜松市）で実施された「C-130輸送機体験搭乗」に自衛官を希望する若人を引率した。

この体験搭乗は、同基地で開催された「エアフェスタ浜松2019」のために飛来した同機の運用を実際に体感してもらおうと行われたもの。翌日に控えた航空祭のために、エプロン地区には航空自衛隊が運用している他の航空機もずらりと並び、中にはラグビーワールドカップの大会ロゴマークを機体に彩ったT-4中等練習機も。参加者たちは搭乗までの間、それぞれの機体の特徴や運用の違いを確認しつつ、機体とともに写真に納まっていた。

そしていよいよ参加者たちは、C-130Hの機体後部にある大きく開いた貨物用扉から機内へ。機内は民間機と違い華美な装飾品などは一切なく、座席も横向き。機内乗員から飛行中の注意喚起もしっかりとあり、エンジン音が次第に大きくなると機体はゆっくりと滑走路に向かい走り出した。一段とエンジン音が大きくなると同時に、参加者の身体は機体後方に押される「G」を感じつつ離陸。大空へ飛び立った参加者たちは、機内の小窓から浜松市街や浜名湖などを望みながら高度5000フィートのフライトを体感していた。

参加者からは「機内クルーの女性隊員が手際良く業務をこなしている姿が、とても格好良かった」「上空から郷土の景色を見ることができ、とても嬉しかった」「この輸送機で今も災害派遣活動に励む自衛官に思いを馳せると、身の引き締まる思いがした」などといった声を聞くことができた。

静岡地本は、今後も航空機などへの体験搭乗の機会を積極的に紹介し、大空へ憧れる若人が搭乗員になれるよう、リアリティの提供に努めていく。

朝の交差点で児童らの安全見守る



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）静岡募集案内所は、10月23日（水）、静岡市立南部小学校の通学路において、同校やPTA役員の協力を得て、児童の安全確保と交通事故抑止の啓発活動を実施した。

この活動は、同校近隣在住の広報官、川間新一郎二等陸曹が、自らも6人の子を持つ親としての強い思いもあって、同校との調整に尽力して実現した。

初日となるこの日は、静岡市の南北に走る石田街道と東西に走る南中央通りが交差する非常に交通量の多い交差点で実施。所員は陸・海・空自衛官の制服姿で横断旗を片手に、横断する児童一人ひとりに交通事故防止と防犯の注意喚起を行い、安全を見守った。

隊員が「おはよう」と声をかけると、児童からも「おはようございます」と元気な大きな声と、とても素敵な笑顔が返ってきた。

当所が担当する静岡市には、自衛隊の駐屯地等は所在しておらず、児童たちは普段自衛官を見る機会がほとんどないため、所員の制服と凛々しい姿に興味津々な様子だった。

静岡所は、今後も2週間に1回以上「旗振りボランティア」として地域に貢献し、学校や住民の方とともに我が国の宝となる若い力を守っていく。

常葉大学「水落祭」で自衛隊をPR



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は10月26日（土）と27日（日）の2日間、常葉大学静岡水落キャンパス（静岡市）で行われた「第2回水落祭」において、大学生が知りたい自衛隊の情報、特に女性自衛官の活躍などを発信した。

今年の水落祭のテーマは「出航」。学生たちは日頃の学習内容や研究成果を発表し、更なる地域との交流を図った。キャンパスには催しもを披露する特設ステージをはじめ売店やサークルブースが数多く設置され、自衛隊も静岡県警や島田市とともに公務員ブースを開設し、2日間で13000人もの来場があった中、イベントの盛り上げに一役買った。

静岡地本は校舎内教室においても、陸・空自衛隊の運用や訓練を体感できるVR体験コーナー、陸・海・空自衛官になりきる制服試着コーナーも開設。さらに現在も各地で継続している台風15号及び19号における災害派遣活動の様子もパネル展示し、今一番活躍が期待され、被災地でも頼りにされている女性自衛官の姿も披露した。

また、各種ある自衛官採用コースもチャットを使って紹介。ジェネラリストとなる一般幹部候補生やスペシャリストとなる一般曹候補生をはじめ、パイロットや医師、看護師などの各種採用試験を丁寧に説明。そのほか、一般事務職に近い会計や補給等の職種もあることを広報官が学生たちに分かりやすく解説した。

説明を聞いた学生からは「女性がいるいろいろな職種で活躍していることを初めて知りました」「自衛官になるコースがこんなにたくさんあり、さらに陸・海・空自衛隊の職種を合わせると100以上もあることに驚きました」といった感想を聞くことができた。

静岡地本は、今後も大学祭など学生が気軽に集うイベントに積極的に参加して、国を守る仕事の魅力を発信するとともに、自衛官を目指す学生が心置きなく「出航」できるよう、頼りがいのある水先案内人として活動していく。